



装備製作系

チートで

異世界を自由に

生きていきます

3

Author: tera

Illustration: 三登いつき

いぐにーる
24歳
冒険者の女性。24歳。
強力な炎の魔法を操る。
母の形見の杖を愛用する。

いぐにーる

冒険者の女性。24歳。
強力な炎の魔法を操る。
母の形見の杖を愛用する。

マイヤーアルバート

アルバート商会の令嬢。20歳。
損得勘定で動く生粋の商売人。
世話焼きな一面もある。

ストロング南蜜

歴戦の闘鶏。
南方に棲息する種で
気性が激しい。

登場人物紹介

MAIN CHARACTERS

ポチ

コボルト。
トウジのサモンモンスター。
毛並みが良くコボルト界では
イケメン。

ジュノー

ダンジョンコア。
パンケーキが大好き。
かなりの天然系。

トウジ(秋野冬至)

あきの どうじ
本編の主人公。29歳。
元フリーターで異世界召喚に
巻き込まれる。
ネーミングセンスが適当。

チロル

スライム界のアイドル。
優しい頑張り屋。
トウジにとっても忠実。

第一章 初めての友達だしっ

秘薬の製作に必要なアイテムを手に入れた俺——秋野冬至は、北端に位置する詰所から、ようやく拠点の街サルトまで戻ってきた。

何気に、半月ほどの時間を費やし山脈北部の探索を行っていたので、久しぶりに戻ってきた我が家は少し埃っぽく感じた。

「じゃ、俺はマイヤーのところに行ってくるから、掃除をよろしく頼むよ」

「オン」

「……！」

「クエッ！」

アルバート商会の令嬢マイヤーから、家に来て欲しいと宿に伝言が入っていた。

なので天井や床など室内の掃除を、ペットのポチ、ゴレオ、コレクトに任せ、俺は帰って早々、再び宿を後にする。

「——こんにちは」

「トウジ、待ったでー」

アルバート商会に顔を出すと、マイヤーが笑顔で迎えてくれた。いったいなんの用なんだろうと思ひながら応接室に入ると、テーブルの上には金貨がたくさん入った袋が置かれていた。

「え、何これ……？」

「こないだ預かつとった分のポジション代や。ええ取引先が見つかってん」

「なるほどね」

以前大量に納品したポジションの代金だった。一応売れた分だけという話なんだけど、この様子じゃ、どこかで大量に需要があったみたいである。

「どっかで怪我人が続出したの？」

「まあ、せやね。お隣さんのウィリアムが、こないだのスタンピードでそこその被害を受けとったみたいでな？ サルトではトウジがポジション配りおじさんやつとったから、そこまで需要なくて商売上がったりやつたけど、ウィリアムではたくさん捌けたんやで」

「ああー」

ウィリアムとは、山脈を越えた先にある、サルトの隣町である。

勇者一行のレベル上げによって引き起こされたスタンピードの被害は、サルト側よりウィリアム

側の方が甚大だったらしい。

さらに、魔物討伐などの仕事を失くした冒険者が、一気にサルトまで流れてきたため、防衛戦力も足りなかったとのこと。

だが、一つ気になることがあった。

「あれ、勇者はどうしたの？ ウィリアムにいるなら、スタンピードも参加してるんじゃ？」

「うちもそれ思つて調べてみたんや。そしたらな、どうにも森を荒らすだけ荒らした後、さっさと引き返してデブリのダンジョンに行つてもうたんやつてさ」

「それはひどいな……」

森の生態系を壊し、スタンピードの要因を作った可能性のある張本人が、いざスタンピードの時になつたら他に行つてしまつていゝとは、勇者あるまじきって感じがする。

「ここに詳しく載つとるで」

呆れて言葉も出ない俺に、マイヤーが差し出した本は、『新・勇者伝説』だった。

この最新刊には、山脈にいた強い魔物を勇者達がいかに倒しまくつたのか、そんなどうでも良いことが、美辞麗句をちりばめて綿密に書かれているそうだ。

読んだ奴のヘイトがすごいことになるんじゃないのか、これ。

「俺も読んだことあるけど、そんなに面白くなかつたよな」

さり気なくデイスってみると、マイヤーも頷きながら返答する。

「せやね。でもな、デブリ国内で売れるのはわかるんやけど……」

「うん」

「なんやサルトでもそれなりに売れとるらしくってな？　こんな本、読んでる人とか見たことないのに、どれくらい数の注文が入っとるんよ。物好きもいるもんやなあ……」

「そ、そうだね、ハハハ……」

多分、それは俺のせいだ。分解すれば強化スクロールの足しになるので、あればただ買い占めを行っていたりする。

普及を早めようとしているのか、手頃な価格で売られているもんだから、ついね。

「よし、ほなお金渡そか。ポーション以外の防具類も含めて、しめて738万ケテルやで！」

「おおっ！」

大量のポーションに加えて、俺の作り出した武器がスタンピード後の需要もあって、想定よりも良い値段で売れたそうだ。

確か、納品した武器類は、すべてなんの捻りもない普通の武器。

それがそんな値段で売れたと言うのなら、この世界では魔装備と呼ばれる潜在能力付きの武器だと、いったいどれくらいの値段になるのだろうか。

職人技能はすでに【匠】で、あれから毎日毎日装備を作り続けて、地味に潜在能力がついた装備をいくつかインベントリに保持していた。

「トウジ、一応売れた物のリストもあるけど、今確認しとく？」

「いや、家に帰ってゆっくりやるよ」

どこで何がどれだけ売れたか、それが記載されたリストになるのだが、量が量だけに、恐らく分厚い冊子状になっていることだろう。

「マイヤー、来たついでに新しく作ってきたポーションと装備を納品しても良いかな？」

「ええでええで！　ほな倉庫行こか！」

そして倉庫へ向かい、半月以上かけてたんまり製作してきた装備品やポーション類を、すべてインベントリから取り出していった。

「で、今回はどのくらいあるん？」

「だいたい四桁^{けた}くらい」

さらっと告げた一言に、やや呆れた顔を見せるマイヤー。

「ま、まあええ……トウジやし、もう驚かへん！」

「あと、武器の他に防具もあるんだよね」

前は持ち込まなかったが、今回はアクセサリ製作のレベル上げにてしこたま作った、多種多様のアクセサリ装備がある。

種類が多くなると、インベントリのスロット数をかなり消費するから、できればこれを機にすべて売っぱらっておきたいと思った。

他にも潜在装備はあるのだが、こうして%上昇が三つとも同じ条件で揃った潜在能力付きの装備は他になく、値段の物差しにするには、これが一番手頃だったのだ。

「なんや？ 攻撃力が普通のより高い名品やん？」

俺から潜在能力付きの剣を受け取ったマイヤーは、剣を鑑定しながら首を傾げる。

この通り、この世界の鑑定スキルだと装備の潜在能力は見えない。

「自分のSTR確認してみて」

「んー？ まあええけど——ッ!?」

言われた通り、装備を持ってステータスを確認したマイヤーの表情が凍りついた。

「こ、ここ、これ！ これ！」

「落ち着けマイヤー、語彙力が皆無になってるぞ」

あれだけ驚かれないと言っておきながら、さすがに魔装備には度肝を抜かれたらしい。

「これ魔剣やんけ！ トウジが作ったんかいな!？」

「うん」

ウィリアムの武器屋で見た剣は、しょぼい潜在能力でも500万ケテルで売られていた。

それとこの驚きっぷりから察するに、STRが合計15%上がるこの片手剣は、かなりの値段で売れるのかもしれない。

「……あつ、一周回って言葉が出てこなくなったわ」

「落ち着いたようで何より」

「なんか、テンションの差がムカつくんやけど」

さて、そんな魔剣の価値を、マイヤーが自分のSTRから逆算して、ざっと判別してくれる。

「伸びしろ的には、STR15%やから、中堅クラスの魔剣やね！」

「なるほど」

潜在能力の等級はレア・エピック・ユニーク・レジェンド・ゴッドの五段階。

すべての装備を最上位の潜在等級で揃えていたネトゲ廃人の俺からすると、レア等級の潜在能力で中堅クラスの部類ってことは、この世界で強いとされている潜在装備は、そこまで大したことないようだ。

それに、武器系には攻撃力%や魔力%といった、ステータス補正%より重要な潜在能力がつく。だから正直、この片手剣は弱い部類なのである。

「なあ、トウジ……」

マイヤーが真剣な表情で、俺の片手剣を見ながら言う。

「これ、さすがにうち一人じゃ捌き切れないから……おとんに話を持っていかないと……」

「そうなんだ？」

『魔』の名を冠する武器ともなれば、普通の武器とは値段の桁が変わってくるので仕方ないか。

「性能を調べる専門の鑑定士に依頼して詳しい話を聞かな、値段もつけられんし……」

「専門の鑑定士？」

「うん。ステータスを、バランスの良い数値に整えた人のことやね」

ステータス補正值が%上昇する潜在装備は、当然ながら持ち手のステータスによって、能力の恩恵が大きく変わってくる。

だいたいの潜在能力を測るために、ステータスの数値を適度に調整した、魔装備鑑定士という専門の職業があるそうなのだ。

鑑定でも見えない潜在能力は、そうやって地道に確認していくしかないのである。

「ああ、ちなみにそれはSTR補正しかついてないから、鑑定士に回す必要ないよ。STR 1000の人が持ったら、合計で175上昇する。つまり装備自体についているSTRを抜くと、差し引き15%の補正がかかるってところ」

「……え？ トウジはこれの能力が見えるん？」

「作った本人だからね」

専門の鑑定士に回すのにもお金や時間がかかると思うので、作った本人だからそれがわかる、という体裁ていさいにしておくことにした。

「ごめん、ちょっと理解が追いつかんのやけど……ほんまに？」

「うん。まあ誰にも言わないでね？」

少し秘密を話し過ぎたかなとも思うのだけど、マイヤーの驚く顔が思いの外面白かったので良

しつてことで。

武器の能力自体は正しい情報なので、鑑定士を通して通さなくても問題になることはないだろう、という判断だ。

「なら、この片手剣は冒険者がダンジョンから拾って来た武器だつてことにして、商会本店にいるおとん經由きよでオークションに出品できないか聞いてみるけど、それはええ？」

オークションか……これは、なかなかの値段が期待できそうだ。

「うん、俺の情報を秘密にしてもらえらなら、それで良いよ。なんなら秘密にする分、手数料を増やしても構わないし」

「いや、言わへんの当たり前のことやから！ ……ふう、よしとりあえず無理やり心を落ち着かせたつたわ！ ほんまに毎回のごとくエラいもん持つて来てトウジはまったく！ 自分が本当に目立ちとうないって本気で思つとんの!？」

「ハハハ」

確かに信頼できない商人あたりに持つていけば、かなりの騒ぎになるかもしれないかった。

そういう意味で、マイヤーとの繋つながりはずっと大事にしていきたいと思う。

俺の貧弱なステータスをまともにするためには、装備の強化がすごく重要となる。

それには特殊強化でお金が湯水のごとく必要になってくるから、多少目立ったとしても、稼げる時にはしっかりと稼いでいくことが大切なのだ。

エクシオルやスペリオル装備にえぐい額が必要になると以前説明したが、普通の特殊強化でも回数を重ねて◇を増やしていくと、同じくらいとんでもない金額になる。

コツコツ稼ぐやり方じゃ、いつまで経っても強化ができない事態に陥^{おち}ってしまうこともあり得る。大きく稼げるのであれば、それに越したことはないのだ。

「よし、じゃあこんなもんだから帰るね」

潜在能力を持った装備はまだあるが、この片手剣を一度売ってみてから、どうするか考えよう。

「ほな、この剣はとりあえず預からせてもらうけど、売れなかつたり、売れるまで時間がかかったりしても怒らんといてや？」

「了解」

物が物だけに、買い手がつくまでしばらく時間がかかるかもしれないが、売れないってことは無いはずなので気長に待つとしようか。



さて、アルバート商会から間借りしている部屋へ戻ると、ピカピカに掃除が行き届いたリビングがそこにあつた。

ポチには届かないところも、ゴレオやコレクトがやってくれるから、天井の隅々までしっかり掃

除がなされている。

ゴレオの力で天井に穴が開いてないか心配だったが、力加減を覚えたのか大丈夫だった。

「おお、ピカピカだ。ありがとな、みんな」

「オ……オン」

「……」

「クエ……」

素直にお礼を述べると、なんだか浮かない表情をするポチ、ゴレオ、コレクト。

「なんだなんだ？ 備え付けの家具をなんか壊したのか？ 弁償するくらいのお金の余裕はあるから、正直に話してくれ」

もし退去しろと言われたとしても、ゴレオが寛^{くろ}げるように、もう少し広めの部屋に移るのも良いだろう。

だとしたら床が抜ける可能性を考慮して一階の部屋をチョイスし、大きなリビングダイニングキッチンと、別で二部屋欲しいところだ。

今は寝室兼、作った装備類を飾る部屋みたいになっているが、メリハリをつけるべく、そこはしっかり分けておきたいと思ったのだ。

まあ、分けてもどうせ職人技能のレベル上げに熱中し過ぎて、リビングのソファで寝ることになってしまう気もするけどね。

「アオン」

俺の問いかけに首を左右に振るポチ。どうやらそんなヘマはしない、と言っているようだ。じゃあなんだろう？

「……」

理由を考えていると、ゴレオが寝室の方をそつと指差した。

「あっちになんかあるのか？」

もしかしてドツキリかな、サプライズかな……ドキドキしながら寝室のドアを開ける。

すると、寝室の奥の壁にドアが存在していた。

「……は？ 何これ？ ここ、広い部屋と寝室だけだったよな？」

約半月、部屋を留守にしている間に、改装工事が行われたとでも言うのか。

いや、そんなはずはない。

百歩譲って隣の部屋とくつつけましたよ、だなんて言われても、受付の人から何かしらの説明があるはずだ。

「……と、とりあえず開けてみる？」

「オン」

頷くポチ。どうやら俺が帰って来るまで、この謎の扉は放置していたらしい。

そりゃ勝手に開けて変なことになったら、責任取れないからな。みんな好奇心は強いけど、お利

口さんな部類だからこういう時はすぐ助かる。

妖精の楽園に行った時もそうだが、余計なことをしでかす奴にろくな奴はいないのだ。

「……なんじゃこりゃ」

そして扉を開けたのだが、本当になんじゃこりゃである。

扉の向こう側は、この部屋の隣の部屋という訳でもなく、真つ暗な階段が地下深くに延々と続いているのだった。

壁の厚さとか、そういう物を一切合切無視した構造、そして地下に繋がる階段。

「えーと……」

この光景について少し考えてみると、似た風景を見たことがあるのを思い出した。

あいつだ、あいつ。

俺の知ってる中に、こういうことができそうな奴が一人だけいる。

「ポチ、今すぐパンケーキを焼いてくれ」

「オン？」

ポチは首を傾げながらも、インベントリから出してリビングの定位置に設置した魔導キッチンで、パンケーキを作り出す。

できるだけ甘い匂いが目立つように、妖精からもらってきたハチミツもトッピングだ。

やっぱりパンケーキって生クリームとかよりハチミツとバターだよなあ……？



さて、そうして焼きあがったパンケーキを皿に盛り、開け放たれた謎の扉の前に置く。

ゴレオに頼んで、バスサバスサとベッドシートで扇^{あお}いでもらい、匂いを階段の奥に送ってみた。しばらく待っていると……。

「——なんだし！ この甘い匂いなんだし！ なんだしー！」

階段の下から、ピューツと小さい何かがかつ飛んできた。

出たぞ、やっぱりダンジョンコアだ！ 階段の材質がちよっと似てたんだよな！

焼きたてパンケーキとハチミツバターの甘い匂いに誘われてきやがった。

「確保だ確保！ ゴレオやってしまえ！」

「……！」

目を血走らせ、鼻息荒くヨダレを撒き散らしながら、パンケーキの前をハエのようにちよこまかと飛び回るダンジョンコアを、ゴレオがシートでぶっ叩く。

「びぎやしっ!?」

そして、すぐにシートでぐるぐる巻きにした。

「むぐぐぐー！ なんだし！ いきなり何するしー！ やめろー！」

シートの中で暴れるダンジョンコア。思いの外力^{ほか}が強いのか、ゴレオも押さえつけるのに苦労している。

「暴れるなって。大人しくすれば、それ食べさせてやるから」

「本当？ わーい！」

俺の言葉と同時に、動きがピタツと止まった。

「ほら、大人しくしたんだから、さっさとそれ食べさせろし」
「なんだこいつ……」

大人しくなったのでシートから出すと、ダンジョンコアはパンケーキに飛びついた。

「うまつ！ 何これ甘くてうまうま！ 旨味だし！」

「……アオン」

「え、それはどんな味かって？ 言い表せないうまさのことだし！」

意味のわからない感想とともに、ポチ特製のパンケーキを両手で千切^{ちぎ}っては食べ、千切^{ちぎ}っては食べするダンジョンコア。

「食べながらで良いんだけど、なんでここにいるのかを説明してもらえる？」

「え？ そっちが来いって言ってたじゃん」

口いっぱいにハチミツとバターをつけて、ダンジョンコアが答える。

「また来てって言ったら、そっちが来いって言ってたし！ だから来たし！」

「ああ……」

そういえば、そんなことを言ってダンジョンを後にした記憶があった。

しかし、まさか本当に来るとは思わなかったのである。ダンジョンコアがダンジョンをほ^ほつぽり

出して街に来るとか、普通あるか？

それでね、とダンジョンコアがさらに言葉を続ける。

「この部屋にいるのが見えたから、驚かせてあげようと思ってスタンバってたし」

俺の魔力の痕跡なるものを辿り宿を突き止め、リビングに備わっている暖炉の煙突から中へと侵入した。そして、びっくりさせようと寝室にてジツと待機していたそうだ。

「でも、なかなか帰ってこなかったから、暇つぶしにダンジョン作ってたし」

そう、その頃の俺は、約二週間ほど費やしてサルト北端へと向かっていたのである。

だからちようど入れ違いとなつて気づかなかつたらしい。

「なるほどね」

なんか、ダンジョンコアって真性の引きこもりって感じがした。もう天才だ。天賦^{てんぷ}の才がある。ダンジョンの規模を大きくするに従って、どんどん外界から遠退いていくんだぜ？

これを引きこもりの天才と呼ぶずして、なんと呼ぶ。

「でもな、街の地下にダンジョンを作るのはさすがに非常識だぞ？」

「なんで？ ダンジョンコアなんだから、ダンジョン作ってなんぼだし？」

「まあそうなんだけど……」

あつけられかと言いつ放つダンジョンコア。軒先^のにできた蜂の巣並みに迷惑である。

「外は良いけど、ここは俺の部屋だから、許可なしにダンジョン作るのはダメだぞ？」

「えー……ダンジョン作りたいし……」

「おいダンジョンコア、だったらパンケーキは無しな？」

「それならやめる！」

ダンジョンを作るといふ本能に、パンケーキが勝った瞬間だった。

素直に言うことを聞いたダンジョンコアが指を鳴らすと、扉はスッと消えた。

「っていうか冒険者！ あたしにはジュノーって名前があるし！」

「へー、そうなんだ……じゃ、もうパンケーキ食べただろ？ 帰れ」

「ひどいっ!?」

憤慨して俺の目の前をぐるぐる飛び回るジュノー。大きなハエみたいだった。

ボチの作った特製パンケーキと紅茶を振る舞いもてなしたんだ、十分だろう。

それに、ダンジョンコアがこんなところにいてどうするんだって話だ。

「街にダンジョンでも作るつもりか？ そんなことしたら危険なのはお前の方だぞ？」

「え、そうなの？ でもボチとかゴレオとかコレクトは平気そうだし……」

「こいつらは俺の従魔だからな、ちゃんと従魔としての印があるから良いんだよ」

「オン」

首に巻いた赤いスカーフをビシッと見せつけるボチ。こいつらは従魔の印もそうだが、すでに顔が広く、街中を一人で歩かせていてもなんら問題はないのだ。

しかし、なんの印もないジュノーが迂闊に街を歩いたら、魔物が街中に入ってきたと騒ぎになつて、狩られてしまうのが落ちだろう。

来たけりや来いと言ったのは俺で、来て殺されたって話はさすがに困るのだ。

「つーか、森に残して来たダンジョンはどうするんだ？」

今は分体かもしれないが、遠くの森にある本体のダンジョンコアを放置して、そっちの方もあり危険な状態なんじゃないか。

彼女のダンジョンがまだ五階層までしかないとしたら、見つかったら俺レベルの冒険者でも余裕で踏破できて、ダンジョンコアを直接攻撃してしまうだろう。

「あれはもう消して来たよ。ダンジョンは本体のある場所にしか作れないし」

「ええ……そんなに簡単に消したり作ったりできるもんなの？」

話のスケールが理解できず、正直反応に困った。

「うん、コアごと持って来たから、ここの地下にダンジョン作れたんだし」

「マジか……ってことは居座る気か？」

「大丈夫だし、あたしはダンジョンに部屋作ってそこに住むから。そこからこんな風にドアを作っちゃえばいつでも遊びに来られるし、迷惑にならないでしょ？」

ジュノーはそう言いながら、天井にドアを出現させたり、床に洞穴^{ほらあな}を出現させたりしていた。

「それどうなってるの？ 建物に穴が開いたりしてないの？」

「ダンジョンから遠くても、入り口の指定はある程度自由が利くんだし！」

俺が前に見たダンジョンは、地面に直接穴が開いていた。

それは成長途中で止まってしまったためであって、実は入り口を複数、別の場所に設けることも可能とのこと。

ダンジョンを地下に作ってしまえば、洞穴のような入り口を設けなくても、適当な場所に入り口を作ってそこからアクセスすることも可能なんだそうだ。

「便利だな」

「でしょでしょ？ あんまりあたしを舐めないで欲しいし！ 部屋にドアが増えるだけだから邪魔にならないし、あと冒険者と一緒に行動すれば、従魔って思われるし！ だから、しばらくここに住まわせてもらおうし？」

「うーん、だったら構わないけど、自分の飯くらいは自分で調達してきてくれよ」

そう言うと、やはりポチの料理やお菓子を目的としていたらしく、ジュノーは両ほを押さえてガビーンとこの世の終わりのような表情をした。

「血も涙も無い冒険者め！ っていうか名前まだ聞いてなかったけど、なんだし？」

「トウジだよ」

「トウジ、だったらあたしを従魔にしてよー！ それなら良いでしょー！」

ジュノーは続ける。

「ダンジョンコアを従魔にできるなんて、まさに伝説の勇者並みに優れた功績になるし！」

「いやー、特に興味ないかな？」

勇者と一緒にだなんて、反吐が出る。

「それに、俺の従魔になるってんなら……一回ジュノーを殺さないといけなくなるぞ？」

「ふあっ!？」

俺の召喚は、図鑑に登録された魔物が対象。登録するには、倒してサモンカードをドロップしなければならぬのだ。

「それでも確実に従魔にできるとも限らないし、今のジュノーじゃなくなるかもしれない」

あくまで、ドロップしたサモンカードが元になるからである。

「や、やっぱりやめておくれっ！」

「その方が良いよ」

俺のドロップ運にも左右されて、サモンカードがドロップしなかったら死に損だ。

「んむー！ でも一人じゃ暇だからみんなと一緒にいたいしー！」

子供のように駄々をこね始めるジュノー。

なんだか面倒になって来たので、従魔用の赤いスカーフを渡すことにした。

「これ、なんだし？」

「従魔用の赤いスカーフだよ。体のどこかにこれをつけてれば、従魔として見なされるから、街中

でも安全だと思う。ジュノーは体が小さいからマントみたいにすれば良いよ」

「わーい！ ありがと！」

俺の言葉通り、赤いスカーフをマントのように羽織るジュノーだった。

「あっそうだ、引越しと一緒にトウジが目当てにしてたあの土地の鉱物とか、なんか珍しいものをお土産として持ってきたんだけど、見る？」

なんだと、事情が変わったじゃないか。それを先に言わないかジュノー。

「本当に？ 見る見る」

「地下に作ったダンジョンに置いてあるから、見に来てよ！」

そう言いながらドアを作るジュノーの後に続いて、地下に勝手に作ったというダンジョンへ足を運ぶことにした。

以前のダンジョンは、薄気味悪い暗さを持つ洞窟チックなものだったのだが、今回は打って変わって、普通に明るいワンルームって感じの内装だった。

「え、これダンジョンなの？」

なんだか拍子抜けした俺の言葉に、ジュノーが返す。

「薄暗くすると魔物が勝手に入って来てくれるから、そうしてただけだし。常識だし？」

「……ダンジョン界の常識なんて知らないし」

ちなみに内装は、温かみのある木造の壁と床。壁際に設置された棚には、適当な調度品が置いて

あつて、さらにはソファや暖炉、キッチンまでついていた。

「なかなか良い部屋に仕上がってるな……」

「えへへ、そうでしょ？ トウジ達がもし遊びに来るなら、こんな部屋にしたら落ち着けるかなって思って、良さげなものをリサーチして配置してみたんだし！ 初めて友達を部屋に入れるから、どんな感じにすれば良いかわかんなかったけど、良い部屋って言ってもらえて、ダンジョン冥利に尽きるし！ えへへ！」

ニコニコしながら早口でそう言うジュノー。

どうやら、引きこもっている間に内装を頑張^{がんば}って作り込んでいたようだ。だが、こいつが初めて友達を呼ぶとか、そんなピュアな情報よりも気になっていたことがある。

「この家具とか調度品、いったいどうしたんだ？」

「棚とかは真似して作れるし。でもキッチンっていうのは、水はダンジョン内にある地下水を通して出せるけど、火が出せなかったから、なんか公園でポロポロになって項垂^{うなだ}れてた露天商のおじさんからこっそりもらって来て組み込んだし！」

「そ、そうなんだ……」

公園で項垂れていた露天商、まさかとは言わんが、魔導キッチンのぼったくりの人かな？

まあいいや、さっそくお土産に持って来たという鉱物を見せてもらおう。

隣の部屋にあると言うので入ってみると、そこには山のように積み上げられた鉱物と、珍しそう

な薬草などがたんまり存在していた。

「ね、ねえ……初めて友達の家遊びに行く時って、こうやってお土産を持って行きなさいって教えられたんだけど……こ、これで足りるし？」

足りるも何も、足り過ぎるくらいだ。

目の前にある量は、装備を作ったりポジションを作ったり、好き放題にしてもしばらく、いや相당한日数分になる量だったのである。

「……ジュノー」

「な、なんだし……？」

ゴクリと唾を飲むジュノーに言う。

「毎日パンケーキ食わしてやるぞ」

「え！ いいの!？」

「うん、友達の証、確かに受け取った。これで俺とジュノーは友達だ、親友だ」

「わーい！」

テンションを上げて俺の顔に抱きついてくるジュノー。

もう俺がこのお宝の山に抱きつきたい。ありがとうジュノー。

第二章 勇者のとぼっち

さて、半月かけて北端へと遠征していたから、さすがに一日の休息を挟んだ。

その後、冒険者ギルドにCランクの依頼を受けに行くと、レスリーに呼び止められる。

「おはようございます、トウジさん。依頼ですか？ ならちようど良いのがあります」

どうやら指名依頼とのこと。

「とりあえず先に話を聞いてから、やるかどうか決めさせてもらいます」

「おや、今日は従魔は連れてらっしゃらないんですね？」

一人で来ていた俺の様子を見て、そう言うレスリー。

「部屋でゴロゴロしてますよ」

もっとも、昨日からずっとジュノーの相手をしている訳なだけだ。

友達がたくさんできてテンションの上がった引きこもりは、一日中ゴレオやポチ、そしてコレクトと遊んでいた。

賑やかなのは結構だが、寝る時に俺の枕を投げ合って遊んだ時はさすがに怒った。

お利口さんだったうちの子が、近所の悪ガキに影響されてしまった、そんな気持ちだ。

まあとはいえ、ポチ達にも楽しく遊べる機会ができて、良いと思う。